

本当の「時間」「モモ」を読んで

大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校
一年 塚原 佑子

いつも私たちがおくらっている時間、いつもは身近にありすぎてあたりまえのようにおくらっている時間。この本を読んで深く考えてみなかったものや時間に対する考え方をあらためて心の中で考えさせられたように思う。

この本の中で一番大事な存在であるのがモモ。つぎきれをはり合わせたスカート。古ぼけただぶだぶの男ものの上衣。モモは新品のスカートも、かっこいい上衣も、もちろんお金も持っていないかった。しかし、モモはそんなものよりもっと大切なものをもっていた。心の底から愛することのできる友達。友達を助けにいくために命をはる勇気人を思いやることのできる純粋な心、だ。これは私たち人間に求められるものであり、とても重要なものだと思う。こんなものは、あたりまえ。と自分は必ず持っていると思うのだが……。自分で自分をよく見つめてみると意外にもっていないものなのだ。それと、モモのもっていたもう一つ大事なものは、人間が人間らしく生きることのできる本当の意味の時間であった。テレビ、ラジオ、車、そういった時間のかからない文明の利器の中で生きている時間。これが本当の時間なのだろうか。いや、ちがう。いくら時間がかかってもいい。命があるありがたさを知り、生きていることを心

からわかる時間であれば。それが本当の時間なのだ。私はなりゆきのままに時間を過ごしていることが多かった。それに時間はなりゆきのままに過ごすものだと思っていた。本当の時間の意味がわかって、今までの考え方をかえさせられてしまった。本当の時間を過ごしたい。私だけでなく、世界中の人々に本当の時間を過ごしてほしいと思った。モモもこう思っていたにちがいない。しかし……

きみの生活を幸せにするために——
時間を節約しよう。

という「灰色の男」たちの言葉によって、モモのまわりの大人たちは必死で時間を節約し、自分自身のためだけに生きる人生を歩まされる。もともと時間なんてどのように節約できるのであろう。目に見えず流れていくものである時間をどうやってためていけるのだろうか。こんなことは大人たちはわかっていたはずである。ましてや得体の知れぬ「灰色の男」というものが事をすすめるというではないか。では、なぜ大人たちはこの「灰色の男」たちの誘いにはまってしまったのであろう。大人たちは初めは誘いにもならなかった。しかし、「灰色の男」の口から「財産」や「損失されている」という言葉が出てくると、損はしたくない。生活を幸せにしたいと思うようになる。つまり大人たちは「幸せ」という言葉にあやつられ、「灰色の男」にだまされたのである。「幸せになる」という言葉だけで自分の得しか考えられず、他のものなんか見えなくなる。そして、最後には自分さえも見えなくなってしまう。今、自分がしていることがいけないことであっても、何も考えずよいものだと思いこんで続けてしまう。すると自分たち

の生活がだんだんまずしくなり、人間のあたたかさを忘れ冷たくなり、本当の時間を過ごせなくなっていく。お金もある。いい服も着られる。文明の利器の中で生きられる。それを幸せと考えてしまう。このようなことは何もこの本の中だけのことではないと思う。今の世界の現状を見ていくと、思いあたることがいくらかもあると思うのだ。世界だけではなく、もっと近くの私たちのまわりでもいくらかも転がっているものなのだ。転がっている石みたいなものだと思う。まわりにいくらかもあるのに気を止めようとする人もいなければ、その石をじつくりとながめて感動する人もいない。大事なものはあるのだが、みんなが忘れかけようとしているのだ。とても悲しいことだがこれが現実なのだ。しかしその石も拾って見つめ直す人が増えていけば、モモのような人が増えてくると思う。世界中の人がモモのようになれば、これほど素晴らしいことはないように思う。

本当の「時間」を失わないように……。私はこの石ころを一つずつ拾って見つめ直したい。モモのように……。

選評

よい本を選んで書いています。テーマを、「本当の時間」にしほり「モモ」の内容をおりまぜながら書かれているため、しつかりまとまっています。

主人公の「モモ」のかわいらしさが、読み手に伝わるような内容がもう少し書かれていれば、作品としてより豊かなものになったと思います。

のことをふしぎそうに見ていました。しばらくして、名前をよばれました。ぼくはきゆうにドキドキしてきました。このまま、先生に会わないで帰りたいくなりました。すると、お母さんがぼくの手をぎゅつとにぎってくれました。ぼくは、ちよつと力がわいてきました。林先生は、メガネをかけていて、わかくて、やさしい声で話してくれる男の先生でした。ぼくは先生を見て少しあん心しました。先生の口ぐせは、

「だいじようぶですよ。」

ということばで、とてもやさしい先生でした。そしてぼくは、林先生が大好きになりました。お母さんは先生と話して、今すぐまじいをして、レーザー光線というのをつかって手じゅつをすることにきまりました。ぼくは、またまた、いやな気持ちになりました。ぼくのいとこのりかちゃんも、顔にまじいをしてなみだが出るぐらいいたかったそうです。すぐに、お母さんが先生に

「まじいは、だいじようぶでしようか。」

と小さな声で聞くと、先生は、わらいながら、「ちゆうしゃやではなくて、ぬるまじいですから、一時間ぐらいいかりますけどいたくありません。だいじようぶですよ。」

と言われました。まじいをしてる間、とてもたいくつでたまりませんでした。

「ピリッ、ピリッ。」

ぼくのほつべたに、何でもレーザー光線が当たります。ぜんぶで十五はつぐらい当たりました。おわつても、まだいたみはつづきます。さいごに、ガーゼを顔にはりつけておわりです。手じゅつ室を出ると、お母さんが、しんぱいそうな顔で、「手じゅつはいたかったの。まだいいの。」ときくので、ぼくはがんばって、「ちよつとしかいたくなかったよ。」

後援団体特別賞

日本子どもの本学会 会長賞

「日にやけない夏休み」

福井大学教育学部附属小学校
二年 中野 大亮

「ピリッ、ピリッ。」
ぼくの左のほつべたにいたみをかかれます。ぼくは、目かくしをされて、心ぞうがぼくはつしちゃうくらいにドキドキしています。

ぼくは、三年ぐらい前、きゆうに左のほつべたに米つぶぐらいの小さなあざができました。そして今は、一円玉ぐらいになっています。ぼくは、ぜんぜん気にしていないのに、お母さんが、手じゅつをすることにきめてしまいました。ぼくはぜつたいいやでした。この前の春休みに、お母さんと二人で、手じゅつのためにびよういんへ行きました。ぼくは、先生の前で、

「手じゅつはぜつたいいやです。」

と言うと、お母さんは、先生とそうだんして、こんどの夏休みまでのばすことになりました。ぼくは心の中で「やつた。」と思いました。そして、ぼくはそのことをすっかりわすれていました。夏休みに入る前にお母さんからそのことを聞いて、ぼくはくらくらした気持ちになりました。やっぱり春休みにしておけばよかったなとこわいしました。そして、こんどこそはぜつたいにしないといけないうんだなと思つてあきらめました。

七月二十四日、ぼくは、お父さんとお母さんと妹の四人で、金ざわのあさの川びよういんへ行きました。ぼくはお母さんと二人で、形成外科のまぢあいに室に入りました。そこには、頭や顔や手に白いほうたいをまいた人たちがいっぱいでした。お母さんがうけつけをしている間、みんながぼく

と答えました。お父さんも、ぼくの頭を、何回も何回もなでてくれました。妹のましろちゃんも、ぼくの頭に手をのせていました。おわつてから、先生が、

「えらかったね。レーザーは、し外線と水をきらいますから、ぜつたい光に当てたり、ぬらしたりしないでください。今年の夏休みは、少しおとなしくしていようね。また来週も見せに来てください。」

と話してくれました。

ぼくは、外へ出るのがいやになりました。なぜかという、ぼくの顔には、大きなバンソーコがはつてあつてみつもみもないからです。じゅくへ行くのもつてもいやでした。

「かつこわるいから、行きたくない。」とお母さんに言うと、わらいながら、

「だれも大ちゃんを見て、わらつたりする人はいないよ。ぎやくにみんな、大ちゃんががんばつて手じゅつをしたから、ゆうきがあつてかつこいいなあつて言ってくれるよ。」

と言いました。じゅくへ行くと、先生やお友だちが、ぼくのまわりにあつまってきて、

「どうしたの。」

「いたかったの、だいじようぶ。」ときいてくれました。なんかとてもうれしくなりました。

選評

「日にやけない夏休み」になってしまったいきさつや、その間の気持ち、いきいきと書かれています。会話文の使い方も上手です。